

令和4年度神奈川県地域の支え合い仕組みづくり事業

Don't tell anyone!
地域資源情報を集めて！！
広めて繋がりよう大作戦！！



見つける
集める
活用する

地域の魅力 集め方広め方事例集

地域の魅力集め方
ハンドブック発信・活用編

よーっコンネー!

地域の魅力の

世界へ!

市民の皆さんだけが知っている三浦の魅力、みんなで集めて発信していけば、三浦の未来を救うことになるかも!?



Again! 地域の魅力って何?

私たちの暮らしているまちの良さってなんでしようか? 例えばあなたが遠くに住むお友達に自分のまちをどのように紹介しますか? 空気がきれい、空が広い、海が見渡せる、夕日が好きなど枚挙にいとまがないほど。しかも、それぞれ個人個人が思う好きなところや取っておきのいいところが違うはず。暮らしの中を見渡せばもともととあるはず。我が家のレシビ、角の家の花壇が素敵、あの桜が満開な時は最高! などなど、あなたしか知らない魅力を教えてください。集めて発信・活用することで地域の大きな魅力に育ちます。

コロナを乗り越えた今だからこそ!

令和2年の年明けから始まった新型コロナウイルス感染症の脅威により、今まで経験したことのない生活の変化を強いられました。「新しい生活様式」として皆が協力しながら地域で暮らす日々を過ごしました。Stay Home も耳慣れない言葉でしたが外出自粛の中、少しでも時間を無駄にしないように各家庭でStay Home の時間を工夫しました。皆さんも思い当たることありませんか? 久しぶりに家を片付けた。遠くに行けないから近所を散歩した。そこには日々の暮らしで忘れていた大事なもののや身近な景色が愛おしく感じる瞬間がありました。そう、身の回りの良さを再発見したのです。その再発見した大事な、愛おしいモノ。コトは実は地域の大事な宝かもしれません。このまま、忘れてしまわないでほしい。ぜひ、その情報をシェアしましょう!

地域の魅力が地域を救う!!

三浦市は神奈川県の中で唯一「消費可能性都市」であるとされました。消費可能性都市とは子どもを産み育てる若者がいなくなってしまうことを危惧するものです。平成27年度に三浦市が実施した調査では市内の若年層(16~39歳)の、なんと4人に1人は将来市外で暮らすことを考えています。逆に令和2年6月の国の調査では東京23区に住む20歳代の若者層の35.4%が地方移住に関心が高まっていると答えたとされています。都会生活者や若い世代の人たちにインターネットでは検索出来ない三浦市の本当の魅力を伝えることができたらもっと三浦市が好きな人になるはず! 地域を救う鍵になります!

三浦の「日常」は、都会生活者や若者にとっての「異日常の魅力」?

令和2年度から「Don't tell anyone! 地域資源情報を集めて広めて繋がる大作戦!!」と銘打った事業を実施してきました。当初は手探りで、とにかく「地域にある良い情報」を集めてもらおう! 集まったら絶対に良いことがおきる! と信じて始めたのです。さあ「集めて」は呼びかけ始めましたが「広めて繋がる」はどうしたらよいか? 当時の私たちは答えを持っていませんでした。私たちはアドバイザーからアドバイスを受けながら「広めて繋がる」ために「集めた情報」を「発信・活用する」方法を探す取り組みを行いました。

その取り組みは、分類すると「アドバイザーと市民によるフィールドワーク」「大学生による実験型フィールドワーク」「市民大学講座受講生によるトライアル」「グループII部活動によるスタートアップ」の4つの

パターンでした。

これらの取り組みの中から、まだ輪郭がはっきりしないながらも、わかってきたことがあります。「集められ、発信、活用されるべき情報」の多くは共通する事項がありそうだという事です。それは、「現代社会が失ってしまったていねいな暮らしに関する情報」のようだということ。言い換えると「三浦らしいていねいな暮らしにまつわるアレコレ」の情報です。昔ながらの手仕事やインスタント調味料を多用する以前の料理、素材や手料理を交換し合うコミュニティ、自然を見つめる観察力、身近な歴史を残し伝える思い。これらの事柄は、何気ない日常の暮らしの中で営まれています。これらの多くは都会では消えてなくなっただけのばかり。そうです。三浦の日常は、誰かにとっては魅力的な「異日常」

に映るはず。

そのために私たちプラットフォームがお手伝いできることがあります。サードプレイスとしての市民交流センターニナイテでの場の提供、スキルアップのためのニナイテカレッジ、活動をはじめ方には伴走型のサポートも用意します。

この本では「発信・活用する」やり方の見本探しの中で特に紹介したい事例を集めてみました。ごく普通の三浦市内において実施した事例ばかりです。特別なことは何もしていません。誰でも参加できる活動ばかりです。ぜひ、興味を持った活動があったら始めてみましょう! そうしたら、また一人三浦の魅力的な「異日常」に誰かが出会うことになるかもしれません。いつまでも元氣な三浦地域をみなさんの活動で盛り上げましょう!



この本の中身は?

HOW TO USE THIS HANDBOOK

三浦市の魅力の情報発信や活用事例をご紹介します。ぜひ参考にしてください!

P04 CASE1 地域の魅力情報発信はじめました!

P06 CASE2 三浦の自然は魅力がいっぱい

P08 CASE3 我がまちのいいところ探し

P10 CASE4 三浦のていねいな暮らしは魅力の宝庫

P12 CASE5 見つけた魅力を追体験しよう!

P14 LET'S TRY 地域の魅力をベースに活動をはじめよう!

P16 (裏表紙) INFORMATION 集まった魅力をどんどん活用しましょう!

地域の魅力情報 発信ははじめました！

経験も資格も必要なし！
スマホ1台で記者になれる方法を学びました。

気軽にブログ記者 始めませんか？

情報発信のスキルを身につけ「三浦の魅力発信活動を始めよう！」そう呼びかけ実施したニナイテカレッジ。令和3年度に実施した「市民記者になろう 聴いて、書いて、伝える技術」では受講生4名が、卒業制作として壁新聞スタイルの「ニナイテ新聞」を作成しました。参加者が市内飲食店勤務のTさん取材した内容なのですが、同じ人物の取材記事でもそれぞれのポイン

トが異なっていて読み比べても面白い内容となり、とても好評で増刷を重ねて配布したほです。

更に、彼ら受講生が中心となって令和4年6月からニナイテウェブサイトに「市民記者が書くブログ」をスタートしました。令和5年3月までに3名の記者により延べ15回記事を掲載しました。それぞれが感じた三浦市に関する季節の話題や身の回りの出来事が綴られています。今後もどんどん更新されますので、ぜひ、定期購読をお願いいたします。

各講座の参加希望状況を見ると、「書き

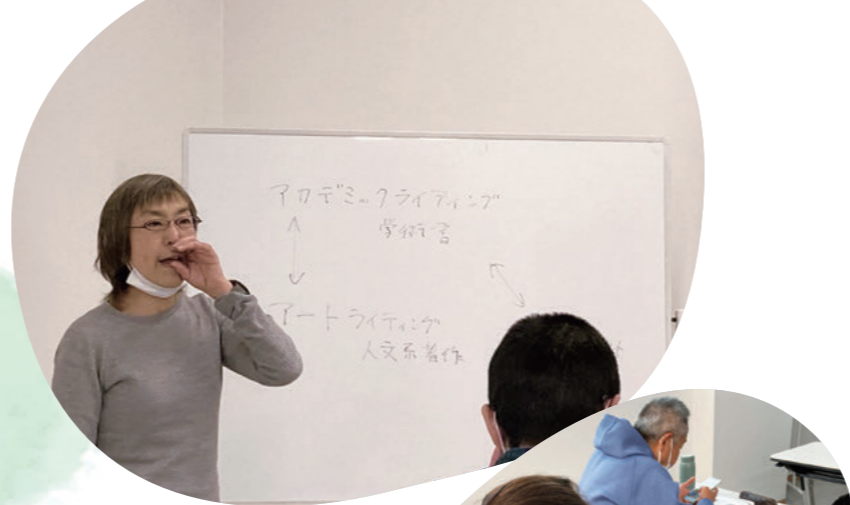
たい」「表現したい」と思う市民は多いのですが、写真や動画に比べて発信する心理的ハードルが高い側面があるようです。そんなハードルを飛び越えて講座に参加してみると講師の言葉や、受講生同士の会話の中から、自分が書いてみたかったものが見つけられ、一歩進んで「書きだす」ことにチャレンジするなど前向きになる方が多くみられました。大丈夫、ブログ記者活動は細やかな伴走サポートを用意しています。書きたい気持ちを実現させましょう！ぜひ、皆さんも少しだけ高いハードルを越えてみませんか。

ニナイテカレッジに 参加しよう！

プラットフォームでは、「ニナイテカレッジ」と称する市民大学を開講しています。令和3・4年度では「地域の魅力」に関する情報を発信するための様々なスキルが学べる講座を実施しました。伝えたいと思っ魅力をどのようなスタイルで伝えましようか？ 例えば文章で、あるいは写真、動画もありますね。物語として伝える上級なテクニックも学びました。

また、情報掲載するメディアにも注目しました。壁新聞からポスター、文集、インターネット、各種SNSもすっかり履修しました。情報機器の操作、遠隔会議システムの実践、スマートフォンを使ったSNS投稿など実践型の講座です。

令和3年度32回、延べ293人、令和4年度では30回、延べ260人が参加しました。受講者はそれぞれのフィールドで少しずつ活動を続けています。プラットフォームでは、学びの補完や慣れないうちの反復練習のお手伝いなどいわゆる伴走型支援を行いながら一緒に魅力の発信を行っています。ぜひ、この学びの輪に参加してみませんか？新しい自分に会えるかもしれません。



創年日日 新聞記者への挑戦

ニナイテカレッジでは、自分たちの活動や地域の魅力を伝える方法を言葉・写真・動画を使って編集する「地域の魅力発信（情報編集能力向上講座）」や、さらに各自が収集し編集した情報を発信する実践講座として「情報伝達メディア作成発信講座」を企画しました。

実践講座「市民記者になろう」では、最終的に4名の受講者が署名入りインタビュー記事を作成し、卒業制作「ニナイテ新聞」を発行し配布したほか、市民交流センターまつりでは壁新聞として展示しました。

「ニナイテ新聞」を手掛けたメンバーには、次なる舞台として、ニナイテのブログページの記者や、市民記者が作るミニコミ紙「創年日日タイムズ」（企画・編集神

奈川新聞出版メディア部）を紹介しました。

「創年日日タイムズ」の記者は、原稿をパソコンで作成し写真データとともに送付しなければならいため、原稿用紙に書き添えていた方は断念されましたが、最終的に安田喜子さんが市民記者として採用されました。

記事デビューまでに、ニナイテの打合せスペースで先輩記者との打ち合わせや、ニナイテカレッジのパソコン講座を受講してパソコンでの原稿作成のスキルアップを図り、8月（44号）から署名記事デビューを果たしました。まさかこの歳になって新しいことにチャレンジすることになるとは思わなかったとのことですが、新たな情報を求めて取材に挑み続けています。

SNSで

発信しよう！

誰もが出版社やテレビ局のプロデューサーとなって思い思いの文章や番組を発信することができる時代となりました。子どもたちが将来なりたい夢に「ユーチューバー」が上位となったことも話題になりましたが、それだけ身近なコンテンツになってきたようですね。

実は、地域の魅力を発信する活動にSNSはピッタリなのです。自分のペースで情報を集めたり、取材したり、伝わりやすいように編集するなど準備の段階はもちろん、実際に情報をアップロードすることも全てスマー

トフォン1台があればできてしまうのです。

SさんはInstagramを活用して得意な料理や身近な景色などの写真と日々の暮らしのコメントを投稿されています。お友達やフォロワーからの「いいね」やコメントが嬉しいそうです。Yさんは日々の暮らしとアピルしたい生業の情報を織り交ぜたツイッターを日々投稿されています。内容はたわいのないモノでも良いみたいです。続けて発信することが大事なようです。投稿の際は「#三浦地域の魅力大作戦」をつけましょう。皆で盛り上げることができそうですよ。



「段ボール貝族館」から 三浦の生物資源を学ぶ

「二ナイテカレッジ」では、2年連続「身近な海岸の生物観察」と題し、観音崎自然博物館学芸部長の山田和彦さんを講師に招いてフィールドワークを行いました。砂浜にて、いわゆるビーチコーミングを行い、漂着物を観察します。三浦は相模湾と東京湾に囲まれても多様で貴重な海洋資源が豊富だそうです。2年目となった今年は集大成として貝を分類し名前を特定し発表するまでを課題としました。1回目は貝の種類や分類について座学で学びました。実物を観察し、図鑑で特定する作業を経て、貝の種類や体系を学びました。2回目では、

いよいよ砂浜で貝を拾い、皆でその貝がどんな貝かを調べて分類しました。もちろん山田さんがしっかりサポートしてくれました。その甲斐あって81種類の貝を段ボールに展開した「段ボール貝族館」が完成しました。一枚貝、二枚貝、巻貝など、種類も色も様々でよく見ないと（よく見ても）違いが判らないものばかりで、訓練が必要でした。しかし、そんな奥深さも知ることができました。山田さんからは写真で行うならスマートフォンでできますよ。とのアドバイスも。ぜひ、身近な生物から三浦の魅力を探ってみましょう。

田んぼと お米とワラ



三浦市は大根やスイカなど一年を通じた野菜の産地です。見渡す限りに広がる畑は美しい景色をみせてくれます。見慣れてくると気づくことがあります。それは田んぼが見当たらないことです。全くないのかというところはないのですが、ごくごく少量になってしまいました。特に戦後の減反政策で三浦では畑になってしまったとのことです。

そんな三浦にとって田んぼはとても貴重な地域の魅力ではないでしょうか。田んぼを作る農家の三上幸一さんは、田んぼを残している理由は「家で食べる分を作るだけなら買った方が安いかもしれないです。ただ止めてしまうと三浦から田んぼがなくなりそうだし、昔は田んぼから米が採れ、ワラで生活用品を作って暮らしていた記憶を忘れたくないと思って。また、田んぼで田植えの時に子どもたちが泥だらけになって遊んで楽しんでほしいので残しています。」とのこと。今後も、田植えで泥遊び、収穫してお米を味わい、ワラで正月飾りを作る。そんな循環のコンテンツを提供していきたいと語ってくれました。これって地域の魅力であり、食育であり、SDGsであり魅力満載ですよ。

CASE 2 三浦の自然は 魅力がいっぱい

三浦の豊かな自然を再発見。
専門家のご教示により、
気づかずにいた魅力と出会うことができました。



地域の魅力をダイナミックに感じる ウォーキングはレカレカ?

「なかよしウォーク」はこの取り組みから生まれた部活動であり、三浦海岸ハイツにお住いの男性グループによるウォーキンググループです。その活動は、中心メンバーの倉田さんを案内役とし、地域の隠れた魅力を発見し楽しむために歩いているとのこと。歩くコースはいくつかレパートリーがあり「ガイドはいないのですが、ただ歩くのではなく、歩き終わった後の食事の際

の1杯が楽しみなんです」ということでした。令和3年度からは社会福祉協議会が実施している未病ウォークとのコラボが実現しました。迎えた1回目の金田地区のウォークは予想どおり大きな反響があり40名近い参加申し込みがありました。晴天の下、やや長い道のりを午前中いっぱい歩きまわりました。ところどころにハイライトが用意されていて、遺跡を見学したり尾根伝いの畑

道を抜けた海岸の美しさに感動したり、楽しいコースとなりました。ゴールの金田漁港にある食堂で美味しい三浦の幸を堪能し、皆様満足な様子でした。
未病ウォークとのコラボレーションは市民が考えたウォーキングとして定着しつつあります。これからも市民の健康のために、新たなコースを紹介して頂きたいです。



二ナイテ写真部 始めました!

地域の魅力を伝える手段に適しているものに「写真」があげられます。今はスマートフォン写真機能が充実して誰でもいつでも写真を撮って共有することが可能となりました。

三浦市は写真を撮るライフスタイルにはピッタリのまちと語るのには「写真屋」を名乗るカメラマン中村りさんです。「ここ三浦では東京湾側に出れば日の出と月の出が、相模湾側なら日の入り月の入り。そして富士山を正面に拝むことが出来る贅沢な撮影スポットがたくさんあります。天気恵まれなくても明日がある。また隣の岬に移動

して再度チャレンジ。こんなことが散歩がてらに出来るのですから「誰でも風景カメラマン」です。」とのこと。

中村りさんが講師となった二ナイテカレッジの受講者でつくる「二ナイテ写真部」というコミュニティもできています。令和4年度に実施した三浦市区長会の写真コンクールでは講座受講生も活躍しました。畑での営み、朝陽や夕陽、四季折々の海岸線、耕作地、まち並、杖拳に暇がありません。そんな身近なフィールドであなただけの一枚を紹介しませんか? ぜひ、写真を使った地域の魅力発信と一緒に始めましょう!



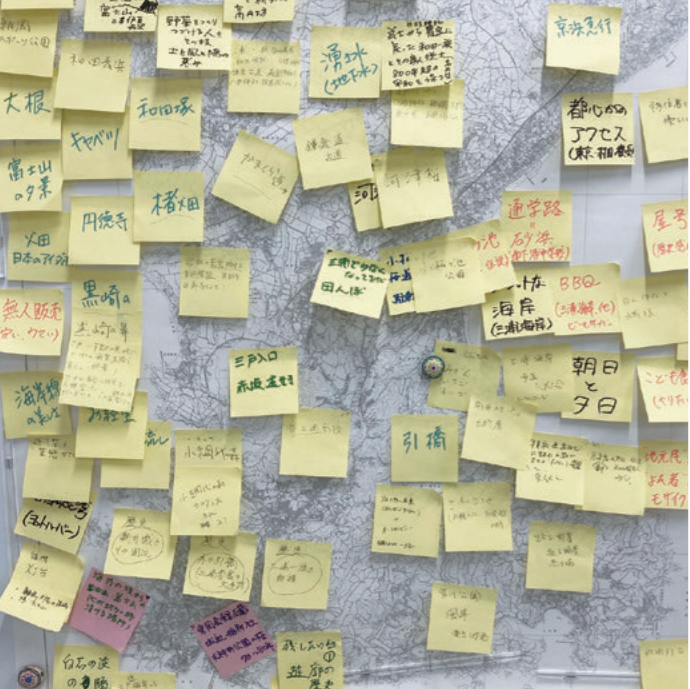
我がまちの いいところ探し

三浦を舞台に繰り広げられた壮大な歴史物語。
ふだん気にも留めなかった日常風景が、貴重な資源であることを知りました。

「我がまちの
いいところ探し」を
やってみよう！」

高円坊ご出身で現在國學院大學観光まちづくり学科教授の椎原晶子さんと「我がまちのいいところ探し」を取り組みました。椎原さんは「都市」「暮らし」「文化」等をキーワードにまち並の保全や古い建造物の活用に取り組んでいます。学生のころから、全国、様々なまちから依頼があり出かけたそうです。初期のころは調査に出かけると、その土地の方々なかなか打ち解けずコミュニケーションができないことがあったそうです。その際に恩師が始めた調査方法が、まちの人から直接「我がまちでよいと思うところを何でもいいから教えてください。」というものだったそうです。そうすると出るわ出る面白いように地域の魅力を採取することができたそうです。この調査方法が「我がまちのいいところ探し」の起源とのことです。

令和4年度では1回目のワークショップで参加者から皆思う「いいところ」を発表してもらいました。総勢18名から86件のいいところが出されました。みな誇らしげに発表していたのが印象に残っています。
2回目では、1回目で出されたいいところを巡るウォーキングを行いました。「鎌倉古道」を歩く、「田んぼ」を訪ね、和紙を原料「楮」から作るプロジェクトの3つの魅力を提案者の説明とともに歩きました。個人個人に内在する地域愛が垣間見える、無いものを探すのではなく、あるものを活かす、身近な魅力に出会える「いいところ探し」今後の開催が待たれますね。



中世に思いを馳せる高円坊

椎原さんがアテンドする高円坊の「いいところ」を訪ねてみました。
中世の三浦一族は現在の三浦市に本拠があり、当時の有力な武将も多数拠点を三浦市に置いていたようです。その中の武将が鎌倉幕府擁立後、「僧門」へ出家し武将としての地位を引退し農業を家業とした暮らしを始めました。その元武将は出家後「高円坊」と名乗ったそうです。当時の文献には高円坊とともに十数名の家来が移り住んだといえます。その時に移り住んだ家来の末裔が今も実直に暮らしているといえます。苗字を見るとなるほどと思ってしまう。そんな中世からの流れを感じるスポットがいくつかあります。
三浦一族でも名を遺した武将の一人「和

まちの歴史に思いを馳せ、 ディテールに注目

「三崎下町」というエリアがあります。大まかに言うと三崎港バス停を中心に半径500mくらいの円の中、特に「魚市場」から「日の出」までの地域を指して呼ばれることが多いです。この三崎下町は天然の良港であり、江戸湾（東京湾）の入口に位置する関係から古くから海運の拠点として発展してきました。近代になり遠洋漁業の

田義盛」が出陣など大事な場面で参拝したといわれる「日枝神社」は鳥居越しに富士山を臨みます。ダイヤモンド富士のスポットとしても知られているようです。
中世といえば武将の交通手段は馬でした。高円坊は馬との暮らしが綿々と続いているそうです。中世は軍事用に、近代では馬は農耕の現場で大いに活躍したそうです。
そして現代の高円坊では乗馬が楽しまれています。サラブレッドを飼育し、会員が乗馬を楽しむフィールドが畑の中にあります。大地の恵みと人々の暮らし、そして、馬との関係が中世からずっと続いている。そんなロマンを感じる魅力が高円坊に隠されていました。

基地として内燃機の発達、冷蔵、冷凍の技術革新などに伴い、短期間で急速に発展し、そして昭和40年代前半にピークを迎え流通の形態を変えながら現在に至っています。その間、狭い三崎下町のエリアには港の機能の変化に伴い、まちの建築物や設備は必要な機能を備えては、更新し、入れ替えなどを行ってきました。現在も昭和40年代の

ピーク時の建造物が数多く残ったままのまち並が存在しています。
横浜市立大学国際教養学部教授の鈴木伸治さんは「歴史に思いを馳せ、まちを歩きましょう。見えてくるものが違ってきます。また、細部（ディテール）に着目してみてください。職人が技を競って建築を行っていたころの仕事がみえてきます。路地にも暮らしが垣間見れます。」と伝えます。
三浦市で左官業を営む鈴木さんは三崎下町のいわゆる看板建築の改修工事で、建設当時の技術を用いて外壁を再生されました。「小さい石の粒をコンクリートに混ぜ込ん

で表面を洗い出し、石の粒を表面に浮き上がらせる洗い出しという技法を使っています。この建物では装飾品に赤色の石を用いていますが、赤の色味が素材によって違うために色を合わせるのが通常はできなくなる。今回は先代が残した古い材料から似た色が偶然見つかった。ひよっとしたら、建設当時のこの仕事は親父がやったのかも知れないな。」まち並みが変わらないのは職人が代々素材や技術を引き継いで、建築を維持しているからかも知れません。三崎下町の魅力あふれるディテールを、ぜひ、楽しんで観察してください。

歴史資源を将来に

「中世三浦歴史探検隊」は昨年10月に旗揚げされました。アダチ・クリスティさんが隊長を務め、現在は30名を超える隊員を抱えております。アダチさんは長年三浦道寸の研究に励み、設計事務所での強みを活かした新井城や三崎要塞のジオラマは一見に値するものがあります。なかなか日の目を見なかったこのジオラマですが、市民交流センターまつりに令和2年度から出展したことがきっかけとなり、「部活動」にチャレンジすることが出来ました。

この事業につながってからのアダチさんの活動はますます加速し、二ナイテカレッジを通じて、その活動の認知も広がりました。更に昨年7月「新井城と三崎要塞のドローンによる紹介ビデオ」が出来上がり、

ジオラマとドローンの2つの強力な武器を引っ掛けて上記の旗揚げとなりました。
ここまでに至る道のりは「大変長かった」ということですが、「私に残された時間が少ない」とますます精神的になっているアダチさん。今後の活動も目白押しとのこと。

今後は毎年5月開催の「道寸まつり」等でPR活動を行い、出来るだけ多くの一般の方に三浦道寸を知ってもらい、会の安定的な運営につなげていきたいと考えています。今後もコツコツと会の活動を積み上げて、三浦市の大きな遺産にしていきたいと。今後の「中世三浦歴史探検隊」活動に乞うご期待！

三浦大根農家を訪ねて

三浦市は言わずと知れた大根の生産地です。現在も冬の大根の生産量では日本有数の産地です。三浦市の大根は江戸末期にはすでに栽培されていたようです。大型で美味、煮崩れないと一世を風靡した「三浦大根」は東京の「練馬大根」と三浦在来種であった「高円坊大根」との掛け合わせでできたといわれています。そんな三浦の大根産地のルーツである高円坊の大根農家鈴木さんのお宅を訪ねました。

当日は少し風が吹くものの晴天で穏やかな日でした。参加者は高円坊のバス停から鈴木さんの畑を目指しました。高台にあるその畑からは相模湾越しの富士山、丹沢山系、お隣の武山（通称三浦富士）までぐるっと見渡せるロケーションです。一列にきれいに並んだ大根たちが参加者に抜いてもらうのを「今か今か」と待っているようです。今回の参加者のほとんどが大根を抜いたことがないそうです。鈴木さんは「コイだことねえのか。」と笑いました。大根を抜くということも「大根をコグ」というのが三浦風です。参加者は思い思いの場所で大根をコイでみます。まずは三浦大根から。三浦大根は先端と首の部分が細く、胴体がしっかりと太い紡錘形、そのため簡単には抜けず収穫作業がとても大変なのです。何度も何度も引き抜

こうとしてもびくともしない、無理に引き抜こうとして折れてしまう。鈴木さんがお手本を見せてくれました。両手で葉の根元をしっかりつかんで左右に揺らしました。更に、揺らしながら円を描き、ほどなくして「ほいっ」と軽い感じで抜き上げました。参加者から拍手と喝さいがおこりました。鈴木さんは照れ臭そうに微笑みながら「最後にブチッと先端の根っこが切れる音がするから聞いてください。大地とサヨナラする瞬間。」と教えてくれました。参加者もやってみます。相変わらず力任せですが何とか「ブチッ」という音を聞くことができました。

ほどなくして、次の体験は青首大根の収穫です。文字通り葉と実の境の首の部分がかきれいなグリーンで、コンバクトなスーパーなどでよく見る大根です。参加者のAさんは先ほどの要領で「ほいっ」と抜こうと思っただけで、「ほ」という間に勢い余って後ろに転がり、尻もちをついてしまいました。そうです。青首大根は収穫が楽でほとんど力を入れずにコゲるのです。参加者みんなで大根をコイですっかり夕暮れも近くなりました。

大きな三浦大根は5キロ以上になるものもあるとか。収穫も手間がかかり、冷蔵庫に入らない。いつの間にか、一世を風靡したはずの三浦大根は主役の座を青首大根に譲って、一時は絶滅危惧種に。「それでも三浦大根はやっばり旨いから、作り続けたい。」鈴木さんはじめ三浦の大根農家の共通の思いです。流通量は減ってもファンがいる限り無くならない、三浦大根のことみんなに知ってほしいな。

CASE 4

三浦のていねいな暮らしは魅力の宝庫

生きることは、食べること。
自然と共に生きてきた三浦の食文化にも、
たくさんの魅力が詰まっていました。



おすそ分けの文化から生まれたもの

「おすそ分け」という言葉は聞いたことがあるという方は多いと思うのですが、日常的に「おすそ分け」貰っているよという方はあまりいないのでは。三浦市は季節の野菜のおすそ分けの文化が色濃く残っています。中でも三浦地域において一昔前は水産物もおすそ分けが頻りにあったそうです。社会福祉協議会のサロン活動から「東岡G&B（ジーアンドビー）」の皆さんのお話がとても面白いという情報が入り、県立保健福祉大学栄養学科のメンバーとともに会いして交流が始まりました。東岡の皆さんが育んだ「素敵な食文化」を少しだけご紹介します。

当時の三浦では水産系の親せきがいる家庭では、両手にバケツいっぱいサバやイカ、イワシが玄関に「ほらよっ」と届く、今では考えられない豊かなおすそ分けの文化があったそうです。現在は漁獲量が減り、流通も多様化したたくさん獲れたとしても販売することが可能ですが、当時は流通量には限界があり、腐らせるなら近所に分けよ

うとおすそ分けにつながったといえます。届いた家庭ではバケツいっぱいのお魚を消費できないので更に近所に分けます。そのお魚を受け取った家庭では何が起きるかという、その魚に飽きた家族が待っているのです。「また○○か」という家族の声を、何とかおいしい料理に替え喜ばせたいと母は懸命に日々の料理をしたのです。おりしも高度経済成長期と重なって、各家庭に便利な電気製品が普及され始めていました。電子レンジやオーブンなど。更に、世界からの情報がいろいろ入ってきて、テレビや雑誌などで各国の調理方法が紹介され、スーパーの棚にはスパイス類も身近になってきました。

そのような新しい調理機器や情報を駆使し母たちは、同じ食材で飽きさせずおいしい料理を、楽しく作ってくれました。刺身はもちろんカレー味やキムチを使うなど、同じ食材で多様なレシピが生まれたのです。食べ盛りの子どものたちも喜んで食べてくれたことでしょう。

しかし、まだあるのです。ここからが東岡の皆さんのミラクルなところなのです。工夫して作った料理を、更にご近所におすそ分けします。料理が届いた家庭でも一工夫した料理を作っている、今度はお返しに手料理をおすそ分けします。その際に、「頂いた○○さんが辛いものであったら、私は甘口でお返しするんです」とか、「私は酸っぱいので」などご近所でバリエーションが様々に生まれきたのです！

このようなおすそ分けの連鎖がその素材ごとに様々な調理方法を誕生させ、共有し、アレンジした。なんとも驚きの豊かな食文化が咲いたのです。「家族を飽きさせない」思いやりと「ご近所と違った味を楽しんでほしい」という思いやりが掛け算された奇跡の手料理たちを発見しました。現在、県立保健福祉大学栄養学科のメンバーが料理の一部をレシピ化しようと試みています。ぜひ、豊かな食文化を体験してほしい、そう願っています。

挑戦！和紙があるまちの再生

地域の魅力集め方ハンドブック説明会の参加者に聞きなれない活動を始められた方がいました。その方たちの活動は「三浦産の和紙を作る」というものです。

江戸時代までは紙などの身の回りの製品は集落ごとで作るのが当たり前で、この地域にも原料と作り方が伝わっていたのだといえます。近代日本は工業化の道をたどり、身の回りの製品はほとんど工業由来の

製品に置き換わっていきました。いつしか紙を集落で作ることはなくなりました。日本の紙は和紙として書道や伝統工芸の分野で使われるため、細々ながら国内数か所の産地で現在も生産されています。その和紙を研究し背景の文化を伝えるNPO法人の代表者と三浦市内の有志が偶然出会って、三浦産和紙を作ってみようという気軽な気持ちから始まった取り組みのこと。

はじめはNPO側から「和紙の原料となる楮の苗を分けてもらえるので、育ててみませんか。」と声がかかったんですよ。」と農家の小杉さん。気候が合わず、いったん

はあきらめかけたそうですが、楮も元気に育つようになったそうです。「楮の皮をむいて内側の柔らかい皮の部分を取り出す作業が第一段階、この後水でさらして、ほぐしていきます。和紙になるのはまだまだ工程がありますが、将来は全て三浦で作りたいと考えています。」

令和5年3月には小学生が皮むき体験を行いました。卒業する生徒の記念になる一生の思い出づくりを和紙を通じてきたらと抱負を語ってくれました。三浦産和紙の取り組みは始まったばかり、今後が楽しみです。



CASE 5 見つけた魅力を

追体験しよう！

小さな三浦を自転車で走ってみれば、
山も海も人も食も、
五感で感じることができました。

まちの魅力を追体験してもらおう！

横浜国立大学国際教養学部鈴木伸治教授と共に、皆でまちを歩き魅力を出し合い、追体験してもらおうマップ作りをチャレンジしました。鈴木先生に伺います。今回はなぜマップ作りなのですか？「令和2年からまちの魅力を探るまち歩きを行いました。地元のゲストの人から聞くエピソードやまちの見どころなどはとても興味深く、誰も彼らの語る事柄を追体験したくなる

でしょう。そのためには手のひらに広げることができるマップが最適なのです。」とのこと。続けて「伝える相手が明快なほうがやりやすいですね。今回は「みさきまぐるきっぷ」のお客様に向けた三崎下町を楽しんでもらうマップ作り挑戦しましょう」

ニナイテカレッジの呼びかけで集まった参加者は三浦に初めて来た大学生、市民記者で活動するYさん、移住組のHさんなど多彩な顔触れの皆さん。地元をよく知るゲスト3人をリーダーにグループに分かれまちへ飛び出しました。

「普段は気が付かないと思うけど、レトロな建築が多いんですよ。蔵のまちの川越に負けないくらい蔵が残っているんですよ……」「三崎下町のお祭りは他になかなかない、祭りなんですよ。普通はお神輿が「わっしょいわっしょい」っていう掛け声かけながら練り歩くんですよ。三崎は木遣り唄で進んでいくんです。お神輿と獅子舞がそれぞれ分かれて練り歩き、クライマックスの宵宮が……」

「ここは江戸時代の遊郭が集積していたところだけど、実は移転してきたんだよ。移転元は……」まちを歩きながらリーダーの話が止まりません。

リーダーの熱い話とともに参加者それぞれの視線で見つめた三崎には様々な魅力があったようです。その魅力を出し合い、マップ化を試みようという挑戦が続いています。今回は完成か？マップ作りは進行中。今後の展開に乞うご期待！



「チャリピク」のご報告

関東学院大学 人間共生学部 共生デザイン学科
准教授 日高仁

交通のモードが変わると体験が変わる

三浦の県道の週末渋滞は慢性的ですが、そうでなくとも三浦を体験するのに車で移動するのはもったいない気がします。かといって、徒歩で歩くのでは行動範囲が限られ、それも残念です。自分の脚で自転車を漕ぎ、地形の複雑さや、音や風を感じながら移動できる自転車が断然、三浦にはベストな気がします。

チャリピクとは

コロナ禍でもできることを試行錯誤する中で、日高ゼミナールでは、アウトドアの活動やピクニックに注目し、その結果、チャリピクの企画が生まれました。三浦市に普及している赤い電動アシスト付きレンタサイクル。これをピクニック用に改造したのがチャリピク号です。チャリピクとは、このチャリピク号を使って、三浦市内のピクニックスポットでのんびり過ごすための体験プログラムです。

チャリピク1号のデザイン

チャリピク1号のデザインは、二つの箱を天秤棒のように両端に取り付けたデザインになりました。前の箱には自分の荷物、後ろの箱にはピクニックセット。試乗していく中で、ちょっと車体重量が重すぎること、ピクニック用の道具が持ち運びにくいことが課題として見えてきました。



チャリピク2号のデザイン

前の箱には自分の荷物、後ろの箱にはピクニックセット。この考え方はチャリピク1号と同じです。チャリピク1号で見えてきた課題を改良するため、チャリピク2号では、前の箱をコンパクトにし、カップホルダーやピクニックシートの収納ができるようにしました。また、箱をハンドルに取り付けることで操作性が向上しました。さらに、後ろの箱は取り外して持ち運びできるピクニックセットとし、4ミリのベニヤ板をレーザー加工機で切断して組むことで軽量化しました。このピクニックセットは、2022年度第6回全国合板1枚作品コンペで奨励賞を受賞しました。

チャリピクマップ

ゼミナールでピクニックを繰り返し、お勧めコースやピクニックスポット、お勧めメニューなどを掲載したチャリピクマップを作成しました。マップのデザインは、ニナイテカレッジの講師としても活躍されているデザイナーの野澤佑妃さん (luck-mook) にご協力いただきました。



モニターツアー

2022年度は、観光庁の「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」にもご提案をいただき、モックアップとして三上農園さんにご協力いただいてビニルハウスで実験してみました。共通の看板や幟のデザインも検討してみました。

チャリピクステーション

チャリピクで立ち寄り、休憩できるスポットを、地域にたくさん作れると良いのでは？というご提案をいただき、モックアップとして三上農園さんにご協力いただいてビニルハウスで実験してみました。共通の看板や幟のデザインも検討してみました。



チャリピクの今後

チャリピクセットではアルコールストーブの火を使ったりもすることから、初心者向けには、モニターツアーのように、案内人が一緒にガイドしながら実施するのが良い気がしています。そのため、地元の方々にチャリピクガイドになっていただければ、チャリピクを楽しみながら三浦のいろいろな魅力を教えてもらえる、とても良いプログラムに成長するのではないかと考えています。今後は、チャリピク号をさらに改良しながら、ニナイテカレッジのプログラムなどと連携して、ツアープログラムの充実を図りたいと考えています。

地域の魅力を ベースに 活動を はじめよう！

学んで終わりじゃない。
ここで出会った仲間たちと楽しみながら
活動を続けられる場をつくりました。



地域の魅力をベースに活動を始めてみよう！

スタートアップ

コロナ禍で見つめ直したもののや事柄ありませんか？ 以前からチャレンジしたかったアレコレもOK！ 始めることは実はとっても簡単なんです。ご紹介した事例のようにスマートフォンだけでできることってたくさんあります。日常で気に入った瞬間を写真で撮ってみる、ちょっとした解説を添えてSNSで投稿してみるとか。だって、三浦市の暮らしには素材がたくさん、身の回りにあふれているはず。まずは、「自分の好き」を探しましょう！

みんなでみんなの学びの場

二奈イテカレッジご存知ですか。
「むつかしそう？ できるかしら？ 続かない？」
心配しなくて大丈夫、みんな同じ気持ちです。受講した先輩方は、ただ半歩踏み出しただけです。あなたも半歩踏み出して挑戦してみましょう。講師や仲間と繋がって新しい自分に会えますよ。

今までやってみたかった「ライティング」や「カメラ」の講座など、その年ごとにプログラムが変わっていくので、いろいろ受講して、できる自分を育ててくださいね。

寄り添う伴走型でサポート

最初の半歩が踏み出せたなら、次の一歩は百歩のための一歩になるでしょう。
「でも、講座の内容がよくわからなかった。」
「覚えたこともすぐ忘れそう。」
「最初の自信がやっぱりもてない。」
そんな悩みにお答えしちやいます。寄り添いながらサポートする伴走型でフォローアップします。悩んでいる時間がもつたないかも。まずは始めましょう！

大事な仲間づくりもお手伝い

一人で活動することももちろん、みんなで活動したいという思いもありますよね。そんな皆さんのための情報提供も用意しています。気軽に好みの団体を探してください。定期的に開催する交流会で好みのグループと出会っちゃうのはいかがでしょうか？ 要チェックです！
皆さんの活動を「体験プログラム」として開催してみませんか。展示発表はもちろんワークショップ開催、フィールドワークの実施等ノウハウをストックしているスタッフに相談してください。
気の合う仲間が集まったら、グループ活動へアップグレードしましょう。部活動を始めるイメージで。会員募集の呼びかけや催し開催の告知などサポートもばっちりですよ！

ZOOM講座受講後のフォローアップ活動

二奈イテカレッジ「デジタル機器学習講座 座事業」ではパソコン講座の他に、オンライン会議システム「Zoom」の使い方講座を開催しました。初級編「Zoomミーティングに参加してみよう」を2回（各定員5名）、中級編「Zoomミーティングを開いて（主催して）みよう」を1回（定員会場5名、オンライン10名）。木下理仁講師の指導により、参加者は自身のノートパソコンからZoomミーティングに参加することができました。前年度の企画で

は、やり方はわかったけれど日常的に使わないため継続性について反省があり、今年度は受講者の有志で復習会を開催することにしました。

月2回程度で、1回1時間4〜5人による不定期開催ですが、毎回、各自の近況報告を聞きながらリアクションボタンやチャット書き込み操作、ミュートやプロフィールの書き換え、画面共有やホワイトボードの操作などを行っています。旅先の写真、散歩コースの海辺の景色や桜、庭な

どの写真の共有で季節を感じたり、日ごとのこぼれ話から、ネットによるマイナンバーカード取得や確定申告手続きの方法、健康の話題から未病やサークル活動や自治会活動、ご近所のお得情報まで、情報交換や生存確認（!?）などができたのは副産物です。お天気の悪い日やコロナ感染症で人込みに行きにくいなどの時期も、オンラインミーティングに参加して誰かと会話を楽しんだり、参加者は他のオンラインミーティングにもデビューして、情報交換をしてい

ます。オンラインで得た情報から、リアルにお会いする機会もあり、コミュニケーションの幅が広がっていることを実感しています。
失敗歓迎の復習会ですが、参加メンバーの皆さんは、毎回上手く使えるかドキドキなのだそう。継続は力なり。Zoom操作は問題なくできています。
今後は新しい仲間を増やし、主催する技術の習得も目指していきたいと思えます。

集まった魅力を
どんどん
活用しましょう!

見つけた魅力が 地域を盛り上げる原動力に なるかも!

活躍を
後押し
します!

三浦市の魅力は何でしょう?あらためて問われると、どうですか?たくさんたくさんあることがわかりましたよね!それらの魅力は実はとっても貴重で価値あるものかもしれません。それら価値ある情報や活動を地域のために活用させてもらえませんか?

例えば、大学が研究するテーマに採用する。子どもたちや観光客が体験したくなるアクティビティになる。学習講座やワークショップのプログラムになる。商品開発の出発点になる。ガイドツアーのガイドに抜擢。そんな活躍のフィールドに降り立ってみませんか?

プラットフォームでは皆さんの活躍を後押しするためのサポートをご用意しています。

活躍への道のり、一緒に歩いていきましょう!都会生活者や若者たちは、本物志向といわれています。忙しい現代的な暮らしでは触れることのできない「ていねいな暮らし方」に憧れを抱いているのです。三浦市は悠久の昔から食生産都市として今に至っています。ていねいに育てて収穫する。海の恵みをていねいに届ける。今も変わらず続けています。暮らし方も同様にひとつひとつ素材を大切にし、ものを大事に感謝しながら生きている。そんな三浦市ならではの暮らしの魅力を、ぜひ若い世代に伝えてください。

コンサルティング

まずは皆さんの相談ごとから始めましょう!やりたいこと、できることを共有させてください。また、求めているスキルや資源があったら相談してください。

コーディネート

催しの出展や活動の場の利用について全体を調整しながら、皆さんの活動がより行いやすくするお手伝いを行います。

キュレーション

皆さんの情報や活動の価値はどこにあるのかを一緒に考え、整理して見せ方や伝え方を特定のテーマに沿って編集し、そこに新たな意味や価値を付与する作業を行います。

マッチング

皆さんと他の活動団体同士や行政・企業・大学等とタイアップすることによりアクティビティになったり、学術的に利用したり、商用が図られるなど相乗効果を生まれるかも。

これらを担当おせっかい役ニインターミディエーターとして
スタッフがサポートします。

お問合せは
お気軽に

三浦市地域資源情報
プラットフォーム推進協議会 事務局
(特非)YMCAコミュニティサポート
市民交流センターニナイテ内

電話
046-845-9919
FAX
046-845-9229

URL
<https://www.miuracc.org/>
e-mail
info@miuracc.org